
月の夜には唄を

零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の夜には唄を

【Nコード】

N4684Z

【作者名】

零

【あらすじ】

白銀の髪と蒼の眼をもつその人はいつも変わらない表情で外を見ていた。

感情など存在しないかのように。

そうして月日は流れたが、彼女の時間は止まったままだった。

一人の青年と出会ったまでは。

序章（前書き）

唄が聞こえた。

なぜだか気になった。

静寂のなか。

ふと気がついたら聞こえていた。

吹き抜ける秋風にて届いたその唄は、不思議と懐かしい唄だった……。

序章

いつからか、ここに来ることが習慣になってしまった。理由は自分でもわからない。はじめはただの気まぐれだった気もするが、はたしてどうだったか。

「貴女にはなにが見える？」

問いかけても応えはない。夜風の吹き抜ける王宮のテラスから外を眺めるその人はいつもと変わらない表情。

「俺には月が見えるよ。満月……いや、ちがうな。満月は明日か。」
確信はないが、見上げた月はまだ少し痩せているようだ。その月の光と同じ白銀の色の髪と蒼い瞳。「おやすみ。」そう言つと微かに微笑った気がした。

序章（後書き）

なに一つ具体的なことが出てきていませんが、ぼんやりと物語の輪郭がみえたでしょうか。
次作にご期待ください。

唄（前書き）

ずっと前から考えていた話なので、ゆっくりでもちゃんと書きたい
と思っています。よろしくお願いします。

唄

「まいったな……。」

そう、呟いた。誰にむかつて、というわけではないが強いて言うなら意地を張って道を聞かなかった自分に、だろうか。

世間一般に言う……彼は迷子だった。二十歳を過ぎた迷子、というのもおかしい話だがそれはこの王宮が広すぎるせいで心の中で言い訳をする。

陽が沈んで辺りは急速に暗くなり、闇が両手を広げて周りの景色を飲み込みはじめていた。

彼は苦笑する。こんな事ならしばらく前にすれ違った女官に道を聞いておくんだった。せめて自分が今、王宮のどのあたりにいるのか、それだけでもわかつていればだいたいの帰り道を予想したりもできるのだろうが、あいにく周りを見渡しても深紅の絨毯を敷いて美しく整えられた廊下が広がるだけだった。

「誰かいませんか。」

この際、恥を棄てて助けを求めてみるも、その声は無人の廊下に虚しくこだましただけだった。

そろそろ夕食の時間で、大部分の人が食堂に集まっているのだろう。きつと今頃、彼の仲間達は大皿に盛られた数々の料理に目を円くしているにちがいない。そう考えると、今まで忘れていた空腹が襲って来る。

「早く帰らないとな。」

言うのは簡単だが実際には少々難しい課題だ。

どうしようか彼が途方に暮れていると、なにかが聴こえた。ほんの微かな、気をつけていないと聞き逃してしまいそうなほどの声。

それが唄だと気がつくまでに数秒かった。

ひどく不思議な気がした。なにを歌っているのかまったくわからないのになぜだか懐かしい。

気がつけば声のする方へ足を向けていた。だんだん声が近づいてくる。何回か角を曲がって廊下を進んだ先に、テラスへ通じるアーチ形の出口があった。外はまだ日が暮れきっていないのかわずかに明るい。その右端、石造りの外枠の段になった部分に、その少女は座っていた。まだわずかに残る光が髪にあたってはつきりと浮かび上がるように見える。

月神。思いだしたのはそんな言葉だった。真冬の冴えた天に昇る月の光によく似た白銀の長い髪が、あるかなしかの風に吹かれて揺れる。

彼女は歌っていた。

やわらかな響きが耳に心地好い。その唄が紡ぎだす言葉の意味は相変わらず判らなかったが、それでもずっと聴いていたいと思った。

唄（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。
わかりにくいところもあると思いますが、次作、がんばります。

心

どれくらい経ったのか、少女がふと、歌うのをやめた。曲が終ったのではなくふいにぷつりと歌声が途切れてしまったのだ。それから風を纏うような優雅な動作で立ち上がると音もなくその場を立ち去る。まるで存在感を感じさせないが、どこか人を惹きつけるような優美な動き。足もとまですっぽりと覆っている白い衣は絹でできているのか衣擦れの音さえしない。陽だまり花のような微かな香りが辺りに飛散した。

「シュナ？」

今起こったことに呆然としてっていると、後ろから声をかけられた。ランプの灯が眩しい。

「アル！」

その灯の向こうに見知った顔を認めてほつと息を吐く。と同時に少女が消えた方を見遣る。自分が入って来たのとは反対側の狭い階段。あの先は一体どうなっているのだろう……。

「シュナ！！！」

「ん？」

強く呼ばれて驚いたシュナに、幼なじみで友人でもあるアルフはため息混じりに苦笑する。

「ん？ じゃないだろう。まったく……。下じゃみんな大騒ぎだぞ。」

アルフがそう言ったとき、テラスに足音が響いた。

「ああ、ここにいたんだね。どこ探してもいないから、てつきりホームシックにでもなつて帰っちゃったのかと思ったよ。」

笑ながら言ったその人を見てシュナもアルフも頭を下げる。国防軍左軍將軍。剣の腕は国内い随一とうたわれる名将……。なのだがシュナにはどうしてもふざけているようにしか見えない。わざとなのか、それとももとなのか、好き勝手な方向に向かって伸びた赤茶の髪がなぜだか目の上で巻き上がって触角のようになってる。

もともとだとしてももう少しやりようがあるだろうに、と思う。

「申し訳あません!!」

隣でアルフも謝ってくれている。本当は彼には何の責任もないのだが。

「いいよ、そんなに謝らなくて。ヨシくん、下のみんなにクロちゃん見つかったよーって言ってきて。」

ヨシ君と呼ばれた厳格そうな男が、軽く一礼して命令を実行に移すべく去ってゆく。

「あの、リード將軍。」

「なに?」

「クロちゃん、というのはその……」

私のことですか、とはさすがに聞けずに黙ってしまう。リード將軍には他人に勝手なあだ名をつける癖があると噂で聞いたことがある。

「うん。君のことだよ。黒髪のクロちゃん。あ、嫌だった?じゃあ、マイゴ君なんてどう?我ながらいいセンスだ。うん。」

遠慮しておきます、と断ってからシュナです、と名前を言ったのが聞いていたかどうかは甚だ怪しい。

仮に聞いていたとしても、正しく呼んでもらえるかどうかは分からないが。

「そおーだ。ご飯まだでしょう。今日はすごいよ。君ら新入隊士の歓迎のためのパーティだから。」

君が迷子になちゃったからみんな待ってるよ、といたずらっぽく言われた。悪気はないのだろうが聞きようによつては皮肉に取れる言いだ。

「事実だな。」

アルフが、シュナにだけ聞こえるようにつぶやく。

新入隊士として国防軍に入隊し、王宮にやってきた初日に迷子になったなど後々までの語り草だろう。シュナは苦笑しながら

「本当に申し訳ありませんでした。なんだか王宮って広くてどこもおんなじような作りだったので迷ってしまつて。」

と、事実を述べる。リードはふつと微笑った。

「そうだよねえ。僕も昔よく迷子になってたからわかるよ、その気持ち。だから地図渡すようになったんだけどね。」

あ、っとシユナが声を上げる。懐には今朝もらったばかりの王宮の略図が一度も開けられることなく眠っていたのだ。敵の手に渡ることと考えて主な階段や目印が書き込まれた簡単なものだだったが、これがあれば少なくとも迷子にはならない。隣でアルフがため息をつくのが分かった。シユナ自身、恥ずかしくて穴があったら入りたい気分だったが、ほんの少し今日の自分に感謝した。
あの唄が聴けたから。

心（後書き）

読んでいただいております。

会話文が多いのでどうしても話が軽くなってしまうました。難しいですネ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4684z/>

月の夜には唄を

2011年12月26日22時50分発行